

プロパガンダと政治 ージークフリート・クラカウアーの『全体主義的プロパガンダ』ー

荻野 雄

Propaganda and Politics:
Siegfried Kracauer's *Totalitäre Propaganda*

Takeshi OGINO

Accepted June 24, 2013

抄録 : 2012 年に初めて出版されたジークフリート・クラカウアーの『全体主義的プロパガンダ』は、ナチズムのプロパガンダに関する極めて注目すべき考察である。1937 年から 38 年にかけてパリで書かれたそれはまた、最も先駆的な研究でもあった。クラカウアーによればナチズムは第一次世界大戦の産物であり、その本質は「権力への意志」である。ナチズムは、絶対的な権力機構樹立のために必要な偽りのネーションの統一を、プロパガンダによって人間の心理的・身体的機構を変化させることを通じて実現したのである。本稿ではクラカウアーのこの論文を詳しく検討し、全体主義的プロパガンダとの対決を通じて、彼の思想が或る新しいモチーフを得たことを明らかにする。

索引語 : クラカウアー, アドルノ, プロパガンダ, ナチズム

Abstract : Siegfried Kracauer's *Totalitäre Propaganda*, which was published for the first time in 2012, is a remarkable study about Nazi propaganda. Because the paper was written from 1937 to 1938 in Paris, it is the pioneer work on this topic. According to Kracauer, Nazism was a product of World War I, and its essence was the Will to Power. In order to establish an absolute power system, Nazism required the simulation of the national unification of Germany, which it attempted realize by means of changing people's psycho-physical structure through totalitarian propaganda. This article investigates Kracauer's *Totalitäre Propaganda* at length and reveals that his thought acquired new motives through confrontation with totalitarian propaganda.

Key Words : Kracauer, Adorno, propaganda, Nazism

1. 甦った作品

あらゆる社会階層の利益に配慮し、いわゆる総中流化によって国家統合を実現してきた自民党優位型の政治が行き詰った前世紀末以降、社会対立の深化と政党の方針の混迷とに起因する閉塞を背景として、「決める」政治を標榜する政治家が様々なレベルで台頭してきた。強い指導力の発揮を目指すそうした人々は、種々の利益代表が集う議会の反対に逢着した場合、当然ながら、それに対抗するために広く有権者諸層からの支持を獲得する目的で、様々な宣伝活動を展開していく。他方で彼らを批判する勢力が、そうした活動を「プロパガンダ」と決めつけ、ナチズムやファシズムとの連想を促していくこともまた当然であるだろう。現在プロパガンダ概念は、敵を貶めるレッテルとして、それ自身プロパガンダのためにも用いられている。

いずれにせよ、政治運動にとってのプロパガンダの重要性は、今日現実政治の場面で再び強い脚光を浴びていると言える。そこで研究の場面へと眼を転じるならば、プロパガンダと、それを最大限に駆使した政治運動であるナチズムとの関係については、ジョージ・L・モッセの『大衆の国民化』(1975)を筆頭に既に多くの成果が積み上げられている。しかし、この主題に関する最も先駆的な業績として挙げるべきなのは、ユダヤ系ドイツ人の文化哲学者ジークフリート・クラカウアーが第二次世界大戦勃発の直前に書きあげた、『全体主義的プロパガンダ』であるだろう。この作品は、ワイマール共和国の政治的・経済的状況を踏まえつつ、クラカウアー独特の視点からナチズムの本質としてのプロパガンダを十全に解き明かして、間然する所がないのである。ただし、2012年7月に公刊された著作集第2.2巻で初めて陽の目を見たため、その内容は一般にはなおほとんど知られてはいない。それゆえ本稿では、クラカウアー研究のみならず、ナチズムまたプロパガンダ研究にも極めて大きな意義を持つと思われる彼の『全体主義的プロパガンダ』を、以下で詳しく検討していくことにしたい。

その前に、その成立史を簡単に辿っておく。1936年半ば頃、フランスに亡命したクラカウアーの窮状を慮ったアドルノが、社会科学研究所の紀要にプロパガンダ論を執筆してもらい、原稿料として彼に幾許かの支援をすることを所長のホルクハイマーに提案した。クラカウアーとホルクハイマーの思想的立場の違いや、両者の相互不信のために多少の紆余曲折はあったものの、1937年3月にはクラカウアーは依頼を受諾し、翌年4月までに『全体主義的プロパガンダ 政治的トラクタート』と名づけられた原稿の全体を完成させている。ところが掲載に当たってアドルノは、紀要には長すぎるという理由からそれを大幅に短縮、かつ彼の側から言えば修正し、クラカウアーは、彼の側から言えば改竄された原稿が自分の論文として印刷されることを拒否したから、結局彼のプロパガンダ研究はいかなる形でも紀要には載せられなかった(ただし規定の原稿料は支払われた)。この作品は、やがてタイプされた清書原稿すら失われてしまったため、いったん地上から姿を消してしまう。既に触れたように著作集第2.2巻の編者たちが、遺されていた手書きの原稿を漁って、苦心の判読の末それを甦らせたのであった。

とはいえクラカウアーの生前に、『全体主義的プロパガンダ』を公表する試みがなかったわけではない。1939年、パリでクラカウアーと知り合ったばかりの現象学的社会学の泰斗アルフレット・シュッツは、この作品を知るやクラカウアー本人とは面識のないアメリカ在住の友人エリック・フェーゲリンと共に、アメリカかフランスでの出版を目指して奔走している。3月の手紙で、或るフランスの哲学者に原稿を託したことを述べた後、シュッツはフェーゲリンにこう書いている。「この試みがうまくいかなかったら、秋にでもあなたに新しい仲介をお願いしたい。これは本当に良い仕事なのです。」¹⁾

2. ナチズムの本質

「全体主義的プロパガンダ」を考察するために、まずクラカウアーが確認するのは、ナチスの政治運動においてプロパガンダはいかなる位置を占めているのか、という点である。そしてナチズムにとってプロパガンダが有する意味の解明は、より根本的な、ナチズムの本質は何かという問いと切り離すことができない。そこでクラカウアーは問う。短期間にこれほどまでに大きな勢力に成長し、遂にはドイツを我が物としたナチズムは、どのような性質の運動なのか。

この問いにいち早く解答を与え、クラカウアーの周辺の知識人に広く浸透していたのが、マルクス主義的な立場からの分析である。それによればナチズムまたファシズムは、独占段階に達した資本主義が脅かされた自身の利益を維持するという目的から、革命勢力を排除するために創出した暴力装置なのであり、褐色のシャツを着て華々しく行進するナチスの党員たちは、実際には背後の大ブルジョアジーの操り人形に過ぎない。そうであればナチズムが駆使するプロパガンダも、せいぜいそれが仕えているボスの利益に沿うよう大衆を動かすための、一つの従属的な手段ということになる。だがクラカウアーは、こうした見方をきっぱりと拒絶する。ホルクハイマー及び社会科学研究所への配慮から韜晦されてはいるものの、独ソ不可侵条約前に脱稿されたこの論文では、現状の社会主義勢力に対する、実践および知的営為の両面に渡っての彼の深い幻滅は既に見紛いようもない。（「今日ソヴィエト連邦はファシズム化している」(56)と、彼は言い切っている。）ナチズムは単なる「独占資本の暗殺請け負い人」(29)では決してなく、それ自身の発展の論理を有する自律した運動であることを、クラカウアーは繰り返し強調する。ドイツにおけるマルクス主義者の敗北は、ナチズムの行動を大ブルジョアジーの利益という観点から解説し、予測することの誤謬の何よりの証明ではないのか。

一般にファシズムが資本主義の発展の最終局面としての独占段階に固有の現象などではないことは、ナチズムの起源からも明らかである、とクラカウアーは指摘する。ドイツで企業の合併が進捗したのはやっと 1924 年以後であるが、ナチズムは第一次世界大戦直後に、当時陸続と生まれていた数多くのナショナリズム組織の一つとして、自発的に孵化したのである。（高く評価しているイタリアの作家イニャツィオ・シローネのファシズム論で、ムッソリーニ一味の本質に関し自身と同様の考察が展開されていることに、クラカウアーは注意を向ける。シローネによれば、ファシズムが「金融資本の考案した悪魔的な発明品」であるなら、それは自身の課題を果たした後は消え去るはずであり、仮に一つだけ生き残るとしたら、それは最もブルジョア的な組織でなければならない。だが「歴史的経験が示したのは、全く反対の事態であった。国家の救済者として名乗りを上げた反動的組織、ファシスト、前衛、結社の中で、常に優位していたのは、最も平民的で、扇動的で、混沌とした組織だったのである。」(28)) ナチズムの中核部隊を構成したのは、上等兵 (Gefreite) だったヒトラーを中心に、かつての将校や一般兵士、そしてまた同様に戦争に囚われたままの社会的アウトサイダーたちであり、その多くが中間層出身であるとしても、彼らを動かしていたのは階級利益ではなく、世界大戦の経験であった。「もともとはナチズム……の隊列は、ひどく雑多な人間たちによって形成されていた。それだけにいっそう、その構成員の由来と関心が忘れられてはならない。彼らは戦争が引き起こした衝撃の呪縛の中で、己を見出したのである。」(23)「平穏と秩序」の時代の到来を予感し、「運命の不当な卑劣さ」を嘆いていた若きヒトラーは、戦争勃発の報を聞くや感激のあまり思わず跪いてこの幸運を神に感謝し、ナチスに流れ着いた戦争帰りの多くのボヘミアンたちも、共和国という戦後のドイツの現状に強い嫌悪を感じていた。ナチズムはブルジョアの反革命の道具として作り出されたのではなく、

世界大戦という非日常に憑かれた人々を胚珠とする運動であって、いわば戦争の産物なのである。

ナチズムが戦争を母体とし、それゆえ講和条約締結後の戦争継続の動きとも見る事ができるならば、それが旗印とするナショナリズムは、決して真の狙いである物質的利益追求を正当化するための単なる口実ではなく、その血肉、その核心である。なぜならナショナリズムは、戦争を肯定することのできる唯一の「理念」だからであり、そしてナチスのナショナリズムの極端な過激さは、それに結集した人々が大戦中に「権力への意志 (Wille zur Macht)」を育んで肥大化させ、この意志を運動の根源的な駆動力としていることを示唆しているであろう。権力への意志こそがナチズムの根本衝動であり、そのダイナミズムを解説する鍵である。「権力意志が、戦後に生まれた諸々の徒党のナショナリズムを狂乱させたものである。……その怒りのうちに、その転覆欲のうちに生きているのは、ヒトラー……の周囲に集まったボヘミアンたちの胸中に渦巻く、たがの外れた支配への欲求である。」(32) ナチズムと独占資本が一時結託するとしても、ナチズムは自律的な展開の途上で大ブルジョアジーに出会い、それを利用することを決めたに過ぎない。ヒトラーとその一味を駆り立てているのは権力への意志、しかも権力それ自体以外にはいかなる理念にも価値にも帰依しない優れてニヒリスティッシュなそれであり、独占資本と歩みを共にしている間も、彼らはあくまでも自身の目的を見据えている。「これらの除隊した将校、これらの失業者、これらの幻滅した労働者と没落したブルジョアジーを集結させたのは社会的な怨恨感情であるが、しかし彼らの支配への欲望はこのルサンチマンの果実ではない。それは戦争に由来している。さらに彼らの権力に飢えたヴィジョン、希求されるべき権力の種類に関するヴィジョンも、戦争に由来している。」(32) 戦争によって刻印されているがゆえに、ナチズムが目指すのは、「戦争用に組織された人間機構に対する支配としての権力」(40)、権威と服従の絶対性によって貫徹され、暴力を第一原理とし、ネーション規模での動員が可能な戦時体制的権力機構の確立である。『塹壕共同体』が、ナチズム的国民共同体のモデルである。」(33)

ナチスの政治運動の究極的な目標であるこの全体的かつ絶対的な権力機構は、ネーション(国民)の統一を不可欠の条件とする。それゆえドイツのナショナルな統一が「最初から、ネーションへの誇りに射抜かれたナチズムにとって最も喫緊の政治的要求となった。権力獲得に奉仕するネーションの統一：これこそナチスの活動の格率である。」(32-33) だが周知のようにワイマール共和国は、階級間のそれを初めとする諸々の深刻な対立を内部に抱えていた。つまりドイツ・ネーションは幾つかの利害を異にする集団へと分裂し、さらにそのそれぞれは自分たちの利益と価値観とを代表する政治組織を有していたから、自身の権力機構にネーション全体を組み入れるどころか、現状では既にドイツ人の多くが他の政党に奪われていることを、ナチス自身認めざるをえなかった。

ただし、全ネーションの掌握を目指すナチズムは、一部の人間だけを代表する政党という、既存の政治システムの中の一つの勢力に収まるつもりはなかった。そもそも、社会諸勢力間の絶えざる権力闘争を保証する制度である議会制民主主義は、ナチズムの目的にとって排除すべき障害以外の何ものでもなかったから、ナチスは、分断され、かつ他の勢力の影響下にあるドイツのネーションを束ねるためにも、眼前の政党政治や議会制を攻撃せねばならなかった。しかし現存の政治システムにおける様々な政治的党派やイデオロギーは、現実の利益に、人々の現実的関心に根ざしていたのであり、そこにナチズムは根本的な困難を見出したのだった。「[様々な政治的] 理念は、生命的関心の派生物、或いはイデオロギー的覆いである。この関心は政党という形象に組織され、戦い合いさえする。……結局は利害関心こそが最大の梃子であると前提するなら、……理念の着火力は、その純粋な理念的内容からではなく、関心に根ざしていることからこそ説明される。」(41-42) とすれば大衆を獲得するには

大衆全体の現実的利益を代表せねばならないが、言うまでもなくナチズムは、その本質上、断裂したドイツの様々な利益を現実において粘り強く調整し、統合することを企図することはない。ナチズムは、「階級闘争を抹消して様々な大衆を一つの帽子の下に集める」(42) ために、利害関心の領域に外科医のように介入する。ナチズム運動においてプロパガンダが枢軸的な位置を占めることになるのは、そのためであった。

ヒトラーは、やはり戦争から、つまり第一次世界大戦における英仏による宣伝活動に触れた経験から、大衆感化の技術としてのプロパガンダの絶大な効力を学んでいた。また彼は社会民主党という別の敵からも、それが実践していたプロパガンダの諸々の方策を積極的に盗み取った。加えて独自の洞察によっていっそうの磨きをかけつつ、ヒトラーたちはプロパガンダによってドイツの人々を惹きつけ、自分たちの運動の賛同者へ転化させようと画策したのである。だがいかに大々的にプロパガンダを展開しても、現実の利害の対立を消し去ることはもちろんできない。それではナチズムはプロパガンダを通じて、何を達成しようとしているのか。それは、人々に現実の利害の対立を「忘れさせる」こと、そうして自身が召喚した見せかけのネーションの統合(宥和)を現実だと彼らに信じさせること、である。「こうしてナチズムのプロパガンダは、実行不可能に、それどころか空想的にさえ思われる課題を負うことになる。そうした課題とは、プロパガンダとして利用することのできる魅惑的な理念を、好きなように操作するために地面から遊離させることである。つまり理念は、それと対立する理念との対[例えば自由主義対社会主義のような]から自由にされ、とりわけそれらがしっかりと根を張っている利害関心から引き抜かれねばならない。」(45)²⁾ ナチズムのプロパガンダは、大衆を自身の現実的利益から眼を逸らせつつ、理念の恣意的なモンタージュが生み出すシュミラクルの中に彼らを引き込んで、それを現実に生きさせることを意図している。その政治的姿勢を窺知させてくれるがゆえに興味深いことに、エリート主義的傾向のためにたいいてい社会主義者にとっては批判の対象でしかないオルテガを、この論文でクラカウアーは「筋金入りの民主主義者」(43)と見なして高く評価し、今の文脈でも彼の『大衆の反逆』(1930)から次の一節を引用している。「何をするにせよ、ファシズムの人間の行動は、坊っちゃんの愚行と同じく、『かのように』の[本気ではなくみせかけの]性格を帯びている。全ての生の領域で悲劇的、最終的、運命的な姿勢が熱心に示されているが、そうした姿勢は空虚な仮象である。……悲劇は弄ばれているのだ。」(43)

「人間が最終的に事実ではなく『言葉の洪水』の虜となること、利益という基礎からプロパガンダによって切り離された理念的上部構造が、編纂されて利益の基礎であるかのように作用すること、[統一的ネーションの]幻想が現実として、仮象が存在自身として現れること」(48)、こうした課題を果たすため、具体的にはナチズムのプロパガンダは、「人間の心理的・身体的構造(*die psycho-physische Struktur der Menschen*)の変革」に着手する。プロパガンダが追求しているこの心理的・身体的機制の変更とは、個人の知的判断力や批判的・客観的思考力を減退させ、人間の自然的な基層を再び前面に踊り出させることであり、言い換えれば近代的な心理的・身体的構造を解体して、大衆を「退行」させることである。ここでクラカウアーの言う退行は心理学的に(言い換えれば無歴史的に)ではなく、近代、つまりラティオと自由主義の時代以前の時期への、自然が支配する時期への精神の逆行として理解されねばならない。その時期精神は自然に従属し、自身を破滅させる圧倒的な外部の力を運命として甘受する神話的な思考の圏域を動き、他人の苦痛を見る原始的な悦びの享受をも躊躇わなかった。「我々の言う意味での革命とは、フランス革命を清算しようとする不屈の意志である」(50)と古参のナチ党员グレゴール・シュトラッサーは叫号し、ゲッベルスもファシズムを次のように定義する。「ファ

シズムはリベラリズムに対する最初の権力政治的審判である。リベラリズムとは、1789年にバスティーユ砲撃によって始まり、深刻な革命的痙攣のうちに一国また一国と制覇して、最終的には諸国民をマルクス主義、民主主義、アナキー、階級妄想へと沈めた精神的な観念世界である。」(50-51) ナチズムのプロパガンダが引き起こすこうした退行は、やはり要素的本能（die elementare Instinkt）の繁殖を必要とした戦争の経験と深く結びついていた。

大衆の現実からの疎外と、擬似現実における幻想的なネーションの統一は、時間の経過と共にその効果を通減させざるをえないから、持続的に創出され続けねばならない。こうしてナチズムのプロパガンダは、諸々の現実的利害を基礎とする政党政治システムの絶えざる攪乱運動として、凝固したシステムのダイナミズム化（流動化）として遂行されていく。「このシステムの蝶番を外し、その安定した骨組みをばらばらにして瓦礫を乱舞させることによってのみ、プロパガンダは己を顕わして影響力を行使する可能性を初めて自ずから獲得する。」(46)（ただし後に述べるとおり、ナチスの活動以前にドイツの議会システムは既に大きく動揺してはいた。）既存の秩序の廃墟の中で、ナチズムのプロパガンダは大衆の退行状態を維持するために、不可避免的に全体主義的となっていく。クラカウアーがおそらくは正にこの論文の執筆を通じて確信を抱き、またそこに自らの希望を据えていったように、世界も歴史も「偶然」に貫かれており、そして人間は全く新たな思想と実践が、完全に不随意的な出発が生起する場である。そうであるがゆえにナチズムのプロパガンダは、統合の仮象が破られないように、こうした個人の自発性をその源泉において塞がねばならない。だからこそナチズムは、プロパガンダを個人の生活の隅々にまで浸透させ、或いは幼少期から人間をそれで首びたしにして、自発的な意志や思考の出現を抑圧するのである。

絶対的な権力の確立を夢想するナチズムは、ネーションの統一を必要とする。現実の対立には手を付けられないナチズムは、プロパガンダによって大衆を退行させつつ、仮象の統一の幻影を映し出す。ナチズムの全権力機構はこうした虚構の統一の上に築かれているから、プロパガンダはナチズムにとって単なる一つの手段に留まるところか、正に体制全体を支える礎なのである。ミュンヘン一揆が失敗に終わった夜の、ルーデンドルフやゲーリングなどが出席した作戦会議中、ヒトラーはこう叫び続けたという。「プロパガンダだ、プロパガンダだ、今やプロパガンダだけが問題なのだ！」(39)

3. プロパガンダによる心理的・身体的構造の解体

i シニシズム／知性への打撃

単に或る教説を大衆に浸透させるだけではなく、いっそうラディカルに人間の合理的な思考に打撃を与えて退行させる全体主義的プロパガンダは、それではいかなる手段を行使するのか。

ナチズムは、戦時体制的な権力機構の確立を企図する優れてニヒリスティッシュな運動であり、近代ヨーロッパが闘い取ってきた一切の政治理念を傲然と見下している。ところがプロパガンダの際、根を断たれた理念のモニタージュに過ぎないにせよ、ともかくもそのつど或るスローガンによってドイツの広範な大衆の支持を得ようとしているのに、ナチズムは自らのニヒリズムをほとんど隠蔽していないことにクラカウアーは着目する。例えばヒトラーは『我が闘争』で、マルクス主義のような一定以上に成長した精神的基礎を有する運動を根絶するためには、単なる暴力ではなく世界観的にも武装した暴力が必要であり、そしてそのとき敵の支柱となっている思想が「正しかろうが誤っていようが」

(MK 165) 問題ではない、と言いつつ。また第一次世界大戦中のドイツ側のプロパガンダに触れて、戦争勃発の責任は協商国側にもあるなどと中途半端な主張をすべきではなく、「たとえ事実がそうではなかったとしても」(MK 177) 一方的に全ての罪を敵にひっかぶせるべきであったと、その拙劣さを批判している。このように本来なら隠蔽すべきニヒリズムを漏らしているのは、決して傲慢さからくる不注意の結果ではない、とクラカウアーは言う。彼によれば、思想や真理、また人間的価値に対するナチズムの冷笑の姿勢はむしろ意図的に顕示されているのであり、このシニズムは、人間の知性を揺さぶって減退させるための、全体主義的プロパガンダの重要な戦略の一つなのである。

この戦略を説明するため、クラカウアーは、ナチズムのプロパガンダがよく用いる技巧の一つである特殊な形式の嘘を取り上げている。彼が「鏡の中の自我像 (Spiegelreflex)」と名づけるそれは、正に自分の犯した悪行や策略を敵へと投影し、そうした犯罪行為の廉で敵を断罪するという手口である。ナチズムは、社会民主党や共産党のテロ行為を仰々しく列挙し、経済政策における中央党の日和見主義を告発し、また大衆心理の弱点につけこむ敵の卑劣さをも批判する。ユダヤ人やマルクス主義者がルーデンドルフに敗戦の責任を押し付けてその政治的力を奪ったとき、彼らは「大きな嘘をつけば必ず一定程度は信じてもらえるという、全く正しい基本方針」(MK 220-221) から出発したと、『我が闘争』でヒトラーは言う。「国民の広範な大衆 (die breite Masse eines Volkes)」は、「原始的で素朴な心情」を持っているから、小さな嘘よりも大きな嘘に騙されやすい。「大衆自身はなるほど小さな事柄では嘘をつくが、あまりに大きな嘘をつくことは恥ずかしく思うため、……極めて卑劣に事実を歪曲するとしても厚かましい発言に対しては、他人の場合でもまさかそれが嘘だとはほとんど信じることができない。嘘だと説明された後でさえ、なお彼らは長いこと疑い、動揺し、少なくともそれが挙げている何らかの理由は真実として受け入れるのである。」(MK 221)「鏡の中の自我像」は、敵を道徳的に傷つけること以上の狙いを有している。ユダヤ人とマルクス主義者に罪を着せる今のヒトラーの発言は、それこそが正に「厚かましい嘘」に他ならないから、ヒトラーが敵に関して指弾した行動指針は、自己言及的に彼の発言自身に妥当する。つまりヒトラーが敵に着せる濡れ衣は、大胆で恥知らずなゆえに大衆の耳には真理であるかのように響くが、同時にヒトラーは敵のやり口としてではあれ自らの大衆操作の秘訣を明かしてみせて、自身の発言が嘘だと告白しているものである。プロパガンダの依拠する原理が当のプロパガンダ自身の中で暴露されており、こうしてヒトラーのプロパガンダは、聞き手をパラドキシカルな状況に、自律的思考が麻痺せざるをえない状態に引き込んでいく。「全体主義的プロパガンダが、確かに真理を、自身の姿を投影したそれに過ぎなくとも真理を含んだ嘘を撒き散らすとき、それが目指しているのは、嘘が信じられること、或いは信じられないことではない。その意図は、ヒトラーの言う疑いと動揺とに到達することである。……プロパガンダの使命とは、嘘と真理の区別を溶解させる両者の間の振動状態を産出し、そうしてプロパガンダの受け手を、遊園地の鏡の部屋が引き起こすような混乱状態に陥れることである。大衆は眩暈を起こして眼をつむるから、宣伝された命題の正しさを問うことは一時断念せざるをえない。」(72)

よく知られているように、ヒトラーと彼の一味がプロパガンダの重要性を強調し、その効果や技法をおおびらに公言するのも、こうした効果を見据えてのことであろう。「プロパガンダを賢明に、また継続的に使用すれば、国民自身に天国を地獄だと、反対に最も悲惨な生活をパラダイスだと、信じこませることができる。」(MK 261)「大衆は請う者よりも支配する者をいっそう愛し、自由主義的な自由からよりも、他の教説の並存を許さない教説から内心いっそう大きな満足を得る。……自身の精神に恥知らずなテロが加えられても、自身の人間的自由が腹立たしいまでに虐待されても、彼らは意

に介さない。大衆は教説全体の内的な狂気に、決して気づくことはない。彼らはその教説の目的意識的で無慈悲な力や残忍さだけを見て、最終的にはそうした力に常に屈するのである。」(MK 43)「国民(Volk)の魂は……, 自身の目的にとっての敵を根絶するときのみ獲得することができる。いかなる時代でも国民は、敵への容赦のない攻撃のうちに自身の正しさの証明を見てとり、反対に敵の絶滅の断念を、自身の正しさが不確かであることの証のように感じるのである。」(MK317) まるで、舞台裏を見せながら公演を行う手品師のようである。もちろんヒトラーがこのような手の内を晒しているのは、啓蒙するためなどではなく、「鏡の中の自我像」と同じく大衆を一時判断不可能な思考停止状態に引き込むためである。さらにそれを通じてナチズムのプロパガンダは、大衆への自身の影響力の大きさも測定している。強力な幻想破壊と同時に与えられる幻想がそれでも奏功するとき、プロパガンダは完璧に機能しているであろう。「大衆は真理で供される。幻惑に対する抵抗力を与えるためではなく、彼らの幻惑の強さを確認するために。」(73) ナチズムのシニシズムの極めつけは、1933年2月のヒトラーの次のような「選挙」演説である。「[我々の] 第一の課題、それゆえに第一の綱領はこれである。我々は嘘をつかない、我々は騙さない!」(72)『我が闘争』から明らかのように、ヒトラーは嘘をつくことを何とも思っていない。正にこの発言自体が嘘であり、騙りなのである。

ii 暴力のエロティシズム／自然への退行

行動と発言との間の同様の矛盾は、先に触れた社会民主党や共産党のテロに対する非難にも認められる。略奪、放火、殺戮、鉄道脱線に手を染める左翼勢力の悪辣さを罵りながら、ナチズム自身は目的のための個人や大衆に対する肉体的テロ(集団暴力)を、全く躊躇うことなく白昼の街路で遂行する。クラカウアーによれば、こうした公然たる剥き出しの暴力行使は、ナチズムのプロパガンダを支える重要な要素の一つであるのみならず、その一部分でもある。「プロパガンダが人間に加える水圧は、最も確実だと見なされていた諸々の連関をも霧消させる。プロパガンダの目的は、理念を利益という基礎から切り離し、そうして理念のダイナミズム化と効果的な操作とを可能にすることである。」(80) ナチズムのテロは、社会に不安を蔓延させるという心理的効果を計算して遂行されており、シニシズムと同様に人間の独立した思考を掘り崩し、理念と利益とを切断するのである。「慢性的な不安は根こぎにし、心理・身体的機構全体を崩落させる。不安は自己維持衝動から枢軸的な関心を放棄させ、……存在と仮象、嘘と真理とが絶望的に統一された状態を創出する。」(80) テロが波及させる衝撃は、人々の日常的自明性を崩壊させるため、現実的利益からも彼らを疎外する。一切が動揺する不安状態の中で、人々はプロパガンダの暗示に対して暫時武装解除するだろう。「不安の深く腐食する作用」(80)をエスカレートさせるために、無法な暴力は意図的に一定期間停止されたり、ナチスの政権奪取後は合法的権力行使と組み合わせられて、テロの恐怖の偏在化が図られる。このとき集団暴力はいつそう予測不可能となり、今にも起るかもしれないという心理的圧迫は、いやましとなるからである。

こうして近代的な心理的・身体的機構を揺さぶるプロパガンダとしてのテロは、知的能力を衰退させると同時に、「人間の構造の最古層」(85)を隆起させていく。「人間の自然との、暗く、問題的で、予見できない格闘から生まれたこの古層は、テロによって、粗野でなお人間的にされていない自然のこの勃発によって、上へとそして表へと引き出されている。」(85) ヒトラー自身ははっきりと、近代社会の原理を嘲笑して自然への回帰を唱道している。正にクラカウアーがその代表的執筆者の一人であった『フランクフルト新聞』に言及しつつ、『我が闘争』でヒトラーはこう述べている。「もちろん『フランクフルト新聞』は……あらゆるまっとうさの権化であったし、今でもそうである。何しろそれ

は決して粗野な表現を使わず、いかなる肉体的な残酷さも退け、いつもただ『精神的』武器での戦いにのみ訴えているのである。」(MK 232) しかしこうした新聞を購読する連中は、「本能を断ち切られて」いるから哀れにも「究極的な認識」には全く鈍感である。「人間は、自然の主人や命令権者に本当に昇進したなどという妄想に耽ることは許されず、……その代わりに自然の支配の基本的な必然性を把握し、上位に立つための永遠の闘争や格闘というこの自然の法則に、自身の存在もまたいかに厳しく拘束されているかを理解せねばならない。」(MK 233)

ヒトラーがここで宣言している、そして全体主義的プロパガンダが推進する脱神話化過程の廃棄、神話的思考への立ち戻りは、ナチズムの目的である見せかけのネーションの統一に、さらには戦時体制的な権力機構の樹立に、都合のよい環境を醸成していく。大衆は自律的に活動するとき、一つのやり方でしか行動しないと、オルテガは書いている。「それはリンチするのだ。」(オルテガ) (96) つまり自然へと退行した大衆のうちで甦ってくる古層とは、ニーチェが「太古の人間性にとっての巨大な祝祭的悦び」(76) と呼んだ、残虐さへの欲求である。ただしこの最も原始的で粗野な欲求は、服従への欲求と不可分に結びついている。プロパガンダによって心理的・身体的機構に衝撃を受けるとき、「人間と文明とは太古の状態へと押し流され、そしてそのとき乏しく弱々しい精神は身を引かねばならないと考えるから、その状態にふさわしい快樂が優勢となる。それは、人間がそこへと引き渡されている盲目的な自然と同じことをするサディズム的快樂であり、自身を自然へと盲目的に引き渡し、それに徹底的に支配されるマゾヒズム的快樂である。この二つの衝動は、切り離すことはほとんどできない。」(86) 大衆のうちで跋扈し始めるこの衝動は、絶対的権力の台頭を希い、その基盤となっていく、とクラカウアーは言う。「寄る辺のなくなった人間は、全体主義的独裁者から、人格に体现された運命に服従するという悦びを得る。見通すことのできない社会状態〔自由主義社会〕が準備する抽象的な運命に打たれるときよりも、現し身となった運命に打たれるときの方が、彼らははるかによく発情するのである。人格化した運命たちは彼を自由に操り、服従を許されることへの彼のマゾヒスティックな衝動に、選りすぐりのセンセーションを与える。」(87-88) さらに服従者は命令者に対して多分に同性愛的な愛着も育んで、体制をいっそう補強していくだろう。「弱い者は暴力に反抗しないばかりではなく、優越者への愛によって己を解放する。同様に優越者も、情欲を強く滲ませながら愛を捧げる者に固着する。相互的な隷属である。」(88)

ナチズムは、暴力のエロティシズムを最大限に利用して大衆の退行を維持し、また深める。全体主義的プロパガンダは、ナチスの白昼のテロに満足を感じる「貧窮化した中間層の人間たち」に常に新たな餌を投げてやり、また彼らの受苦の歓びにも十分な糧を供給しておくことを怠らない。偏在化した暴力は大衆を不安に陥れると同時に、魅惑してもいく。「不安が、テロを受けた者と彼らの利益との間に楔を打ち込むことに十分成功しなかったとしても、体系的に段階づけられたテロが不安に苛まれる者や迫害される迫害者のうちに煽りたてる快感は、過つことのない確かさでこの疎外を成立させる。」(88) 第三帝国当初に観察されたドイツ社会内での歓喜の広まりは、秘密国家警察の支配にもかかわらず見られる奇妙な現象なのではなく、正にゲシュタポの抑圧をこそ一つの刺激として産み出されている。同時に全体主義体制は、不安の過剰昂進が効果を損なわないように、抜け目なく大衆に庇護も与えている。ナチズムは冬季貧民救済事業を展開し、また歓喜力行団を組織して、ワイマール時代には不可能だった様々なレジャーを労働者に提供した。(なお歓喜力行団は、生産関係を維持したまま労働者に地位が向上したという見せかけを与えつつ、彼らの余暇をも管理して、自発的思考の芽を摘み取る意図も持っていた。) 安心感の広まりにも配慮される大衆は、希望、不安、快感の間を絶えず

動揺させられるのであり、翻弄された彼らが落ち着く唯一の可能性は、この揺れに適応することとなる。そしていったんそれに慣れた人間の身体機構は、プロパガンダが主催する振り子運動からの逸脱を、深淵への転落であるかのように感じてしまう。「かくして、純粋に全体主義的プロパガンダの恩寵に依存する精神の体制が形成される。……テロ、光輝、福祉の形態で現われるプロパガンダは、有機体にとって麻薬のごとく不可欠となるように、自身が代表する権力を上演する術を心得ている。」(90)

ナチズムの全体主義的プロパガンダは、人々を現実の利益から遊離させつつ、こうして彼らを偽りの統合のなかに引き摺りこんでいく。さらにプロパガンダとしての暴力は、この非現実独特の重みを与えもする。オルテガの言うようにファシズムの人間は「不真面目」であり、ナチズムも自身がそのつど掲げるスローガンを信じていないにせよ、テロを行うナチスの青年たちには、自分たちが仕えているのは幻想ではないという幻想が、正に暴力を通じて喚起されるのである。「テロの意義は、ヒトラーユーゲントにもそれには参加していない公衆にも、遊戯は遊戯以上であり、狂気は規範であると確信させることにある。……ナチズムはテロを利用して、現実を忘却させ、仮象に転覆的な力を与えようとしている。」(84) 現実であることを暴力を通じて自他に思い知らせていく虚構、街路で情け容赦なく人の命を奪いながら演じられる喜劇、それがナチズムのプロパガンダである。「コミック雑誌が現実になるなら、精神は恐怖で満たされざるをえない。」(85)

iii 大衆の国民化／ネーションの幻影

しかし国民統合の仮象を「現実化」するために使用されている最も中心的な手法は、ナチズムのプロパガンダの典型的手段とも言うべき、「大衆」状態の創出である。具体的にはそれは、念入りに準備した大衆集会や大衆行進の実施、またマスメディアを媒介とするそれらの国民全体への伝播などであるが、こうした宣伝活動でナチズムが創出することを意図しているのは、決して共通の利益に覚醒した一枚岩の集団ではなく、全く違った利益を有する様々な社会層を一定期間寄せ集めただけのいわば「街路の大衆」、ヒトラーの言葉を用いれば「広範な大衆」である。ナチズムのプロパガンダは、例えばマルクス主義が少なくとも教説上は主張している大衆状態の解消ではなく、むしろ反対に人々を私的空間から誘い出して、彼らを広範な大衆に転化させることをこそ目論んでいる。なぜならこうした大衆の一員となると、個人はその個性的な部分においてではなく、他者と共通の部分、つまり自然的基層から行動するため、人々は常に不可避免的に退行していくからである。だからヒトラーは、広範な大衆を「自然の一破片」(MK317)と呼ぶ。そしてナチスの宣伝相ヨーゼフ・ゲッベルスは、「街路は現代政治の特徴である、街路を制圧する者は、大衆を制圧する」(94)と喝破した。先に触れたようにヒトラーは(またゲッベルスも)、退行した大衆にプロパガンダする際の鉄則を熟知していた。大衆は抽象的知識を少ししか持っていないため、常にその感情に訴えねばならない、しかもその感情は非常に単純であり、細かいニュアンスには気づかず、いかなる中途半端なものも弱いものも受け付けない……。全体主義的プロパガンダは、これらの認識に依拠して「広範な大衆のネーション化(die Nationalisierung der breiten Masse)」(MK316)に乗り出すのである。

もちろん、ナチズムのプロパガンダは現実に偉大なドイツ・ネーションを立ち上げることはない。実際にはそれは、大衆集会や行進を前代未聞の規模で、壮麗かつ儀式的に執り行うことによって、広範な大衆のうちにネーションの幻影を浸透させていくのである。このとき大衆は、自己を美的に享受する。充満する光と音楽の中で、無数の鉤十字の旗がたなびく整然と並べられた人間の集塊の中で、行進やシュプレヒコールのリズムの中で、数万の人間が一斉に行う総統へのローマ的敬礼が引き起こす

高揚の中で、大衆は自己自身に陶醉させられる。全体主義的プロパガンダが演出する大衆を素材とした美的スペクタクルは、権力の圧倒的な顕現として、国民的な栄光の領域へと参加しているのだという錯覚を大衆に抱かせるのである。「全体主義的プロパガンダは、国民（Volk）を権力およびその栄光の化身として賞賛する。組み立てられた大衆から放射される魔力を完全に無敵にするために、ナチズムはあらゆる手段を駆使して、あたかも大衆が国民に形成されたかのような幻想を産出する。」（115）大衆のデモンストレーションを、政治的或いは社会的な次元から感官を刺激する記念碑的演劇や、ニヒリスティッシュなパレードに転換するだけではなく、一般に全体主義的プロパガンダは、大衆のうちにあらゆる事象を美的な観点から見る姿勢を定着させようと努めている。ナチズムのプロパガンダは「芸術のための芸術」運動の末裔であると言えるのだが、こうした「大衆の審美主義化」が企てられるのは、問題のある現実すら美的な鑑賞の対象へと転化させることによって、それらが批判的に分析されることを妨げるためでもあるだろう。

さらに、ナチズムの指導層の計算に従って街路を行進し、巨大なホールに整列する広範な大衆は、召喚された国民の一員として自己陶醉し、合理的な思考力を減退させているため、暗示を受け入れやすい擬似催眠状態にある。圧倒的なスケールの大衆活動という見せかけの統一の中で、プロパガンダは彼らのうちに暗示を通じてネーションの仮象を固めていく。ヒトラーはいつものシニシズムで言う。「大衆集会はまた、次の理由からも必要である。すなわち、開始されたばかりの運動のなりたての支持者で、一人ではないかという不安に陥りがちな人間は、大衆集会から、たいていの人間に活気や勇気を与える大きな結びつきのイメージを得るのである。……群れの中に入れば、現実にはそれを否定する千もの理由がある場合ですら、人間は常になお或る程度は守られていると感じるものである。」民衆集会で運動の数千の同胞に取り囲まれ、孤独ではないと感じて教説の正しさを確信するとき「人は、我々が民衆暗示と名づける魔術的な影響に服従する。」（MK 445）大衆の中に残存している、悟性の抵抗よりも強力な感情の抵抗を克服するため、ナチズムは、広範な大衆がただそれにのみ服従する「話された言葉の魔力」（ヒトラー）を駆使する。演説が大衆の自然的層の琴線に触れる「神秘的な力」（再びヒトラー）を帯びるように、ナチズムのプロパガンダはやはり入念な準備をする。先に挙げた広範な大衆の根本的な特質に対応して、演説は知的な議論ではなく「リズムの根源力」に依拠すること、心に浸透させるため単純かつ具象的な主張を反復すること、疑いを寄せ付けない絶対的な確実性の口調を守ること、暗示の効果を増大させるため、演説は人間の抵抗力が減退する日暮れを待って、聴衆の神話的空想を刺激する歴史的建造物や舞台装置の中で開催すること。象徴が発する不可思議な牽引力も忘れられることはない。「全体主義的プロパガンダが大衆を誘いこんでいく旗の原生林が密生していればいるほど、大衆はよりいっそう素直に、闇に響く声に聴従していく。」（100）さらにナチズムのプロパガンダでは、新たな技術的発明品であるラジオも、「大衆産出と大衆の見渡しがいまでの拡張の手段として体系的に利用され尽くしている」（113）。「放送が住居を公共的な場所とする。」³⁾ こうして呪術化された演説を通じて暗示されるのは、「国民の使命」に関する偽の理念だけではない。「国民の敵」に関する擬似的な知的言説もまた、ばら撒かれるのである。神話への退行の結果としてはびこる人種妄想、さらに、多くの敵を認めることは大衆の確信を揺らがせて客観的な思考の回復を許すから、常に一つの敵の虚像を作り上げておかねばならないという全体主義的プロパガンダの原則に支えられ、ユダヤ人に関して宣伝される偽物の知的判断は、揺るがされた個人の知性の中に刷り込まれていく。「個人的意識を大衆意識に人為的に接合することによって、権力は個人的意識の再生をいっそう根底的に妨げている。」（105-106）

ナチズムの全体主義体制は、ネーションの幻想に囚われた広範な大衆を基礎としているがゆえに、生産過程を中断させてまでも大規模な大衆動員を繰り返している。だが「テロと同様にそのシステムの根本前提」(112)であるにもかかわらず、こうした大衆に対してもナチズムはシニシズムの戦略を躊躇しない。ヒトラーは大衆に対する侮蔑を表明し、その対極としての人格を賛仰する。ただしニヒリスティックな権力意志の賜物であるナチズムにとって、人格とは、ブルジョア的な自律的人格でも全面的に自己の能力を展開させたゲーテ的なそれでもありえず、大衆の指導者であることに尽きていた。ナチズムの称揚する人格は大衆から独立してはおらず、大衆を必要とし、大衆に依存した存在に過ぎない。先に引用した大衆集会に関する言葉で、ヒトラーは敵へと投影された真理ではなく「真理の原イメージ」(110)を、すなわち自分自身の真実の姿を漏らしている、とクラカウアーは言う。ヒトラーもまた、自力では立つことができないために仲間を求める、一人の孤独で不安な大衆人なのだ。

iv プロパガンダの論理的帰結

このようにナチズムのプロパガンダを分析した後、得られた知見に基づいて、クラカウアーは全体主義的プロパガンダの行く末を予見していく。(クラカウアーがこの論文を書き上げた1938年初春は、ドイツによるオーストリア併合の時期である。)ナチスは政権奪取後直ちに大規模なドイツの改造に乗り出して、支配的カーストが君臨する絶対的な権力機構を建立し、再軍備を激しい勢いで押し進め、「戦後の組織された資本主義を一種の統制経済——『防衛経済』——へと展開」(159)した。ゲッベルスは、「ナチズムにおいては仮象が存在となる」(155)と胸を張る。だがこの言葉は、彼の意図とは違った意味において正鵠を射ているであろう。ナチズムにとって、依然として「一切は、擬似現実が現実として妥当するような、心理的・身体的体制の維持に掛かっている」(156)のである。それゆえ絶対的な権力機構が樹立されてからも、プロパガンダが持続的に緊張を作り出していかななくてはならない。弛緩することが許されないからナチズムにはユーモアはありえないが、他方でナチスの独裁体制下で擬似現実を生きている人間は幻想の世界を現実として受け入れているため、彼らの世界はあたかも狂人のスケッチが生命を得たかのような、不気味な滑稽さをも湛えている。

しかし潜在的にくすぶる現実の利害の対立と、掲げるスローガンの御都合主義的な切り替えの反復とは、やがては見せかけの現実内に内在する綻びを広げていかざるをえない。ナチズムの偽造された世界は、徐々に掘り崩されていく。それゆえ全体主義的プロパガンダは、「リズムの根源力」や「徹底的に組織された権力機構の美的な魔力」(170)への依存を深める一方で、次第に自身の根源である権力意志自体を前面に出し、かつその方向を国内から国外へと切り替えて、虚構のネーションに浸る広範な大衆を魅惑せねばならない。「階級均衡の理念は霧消し、権力充実の観念がプロパガンダ的な主要モチーフとして残る。」(169)全体主義的プロパガンダは、発展の或る時点から選択の余地なく外政に、ドイツの対外的拡張の実現に重点を置き移していく。「ナチズム……の支配組織の凝固化と並行して、この組織の堅牢さを再び脅かすプロパガンダの委縮過程が進行するので、……独裁制はその権力意志を膨張衝動において発揮しなければ、プロパガンダと共に崩壊してしまう。」(170)

ヒトラーは最初の国民投票へ向けて、1938年にドイツ国民にこう呼びかけた。「私はこの日、世界史上最大の軍の総統となるであろう。なぜならこの4月10日に賛成票を投じるとき、私は知るからだ。私の後ろに5千万人ものドイツ人がついて来ていることを。また彼らも全員私の標語だけを知っていることを。一つの国民(Volk)、一つのドイツ帝国!。」(172)「ナチズムとは可能な限り最大の権力機構の希求に尽きている」(172)ことを、決定的に表現しているこの言葉は、ヒトラーの国際社会に対

するプロパガンダである。帝国の夢を追求するナチズムのこうした対外的プロパガンダも、国内向けのそれと同じ経過を辿る、とクラカウアーは指摘する。当初ナチズムは、今の発言の如き戦争の可能性の示唆などを通じて、国際世論を「民族自決」や「反ボルシェビズム」などの嘘に固着させたが、プロパガンダの磨滅と共にそれらを投げ捨て、その根源である対外的な権力意志、つまり帝国主義を露わにしていくなのである。対外的な威信の高まりは、国内の擬似現実を強化し、また膨張政策のためには、プロパガンダによって国内的な準備が整えられねばならない。こうして「最終的に世界プロパガンダと国内プロパガンダとは、隙間なく噛み合っていく。……完全にその名に相応しい全体主義的プロパガンダは、必然的に世界基準のプロパガンダである。」(173) 両者の合奏は、一つの必然的なクライマックスに達するだろう——つまり戦争に。戦争は、国内で行き詰った独裁制の一つの逃げ道ではなく、全体主義の礎であるプロパガンダの発展の論理的な帰着点なのである。「全体主義的プロパガンダの騒乱の背後に、髑髏が浮かび上がっている。」(173)

4. なぜドイツでプロパガンダは成功を収めたか

『全体主義的プロパガンダ』に関して最後に、クラカウアーは決してプロパガンダを、歴史的文脈から切り離して抽象的に論じることが可能な、いかなる状況でも同じ効果を発揮することのできる技法とは見なしてはいない、という点を強調しておきたい。ナチズムの場合にしろ、また後年考察するアメリカの広告の場合にしろ、プロパガンダの呪術は社会の病弊が程度の差はあれ進行している状態を必要条件とすると、彼は考えていた。「他の全てのプロパガンダもまた同様であるように、全体主義的プロパガンダが効果的でありうるのは、少なくとも宣伝活動の当初において、いずれかの場所でそれに感染しやすい大衆を確保している場合に限られる。領土を征服するためには、橋頭保が必要なのである。」(139) 言うまでもなくドイツで全体主義的プロパガンダを奏功させる環境は、1929年の経済の急激な縮小を起因にして整えられた。この経済危機は従来の自由主義体制の挫折を示唆してはいたものの、マルクス主義が予見したようなプロレタリアートとブルジョアジーとの先鋭な対立を帰結させはしなかった。ドイツでは1924年以来進捗した資本の集中つまり企業の大規模化の結果、大量のサラリーマン層＝新中間層が誕生しており、そしてクラカウアー自身が1929年の『サラリーマン』で先駆的に調査したように、彼らはやはり同じ時期に開始されたドイツ企業の合理化によって、肉体労働者層と著しく似た境遇へと追いやられていた。この新しい中間層が、経済の瓦解後の混乱の中で一つの独立した政治勢力として台頭してきたのである。ドイツの中間層は、第一次世界大戦前はブルジョアジーとして古き権威に従属するだけだったのに対し、「戦後は[新中間層として]没落、階級脱落、プロレタリアート化の憂き目にあい、必要に迫られて政治的に活動的な大衆へと一体化していった。この新しい組織が、既存の社会機構を揺さぶったのである。」(122)

それゆえにドイツの場合、経済的破局の作用は共和国時代を通じての社会構造の変化によって独特の屈折を受けている。注目すべきことに、この認識に基づいて、当時の窮境を打開する方途として要請されていたのは決して資本主義経済の廃棄などではなく、国家の積極的な経済への介入を通じての社会統合の実現であったと、クラカウアーは断言している。彼によれば、「国家の戦後の危機は、本質的に、古い形式の国家組織と新しい社会的勢力との間に存在する矛盾の表現であった」(124) というシローネのイタリアに関する診断はドイツにも妥当するのであり、そのうえでクラカウアーは、「新自

由主義者」アレクサンダー・リュストウの 1932 年の発言を、賛意を込めつつ引用する。(リュストウの言う新自由主義は、社会政策的意図に基づく市場規制を説く立場を指す。)「歴史的状況を顧みれば、古い自由主義も、極端に強い国家には対立しながらも国家の衰弱を望むことはなく、この所与の強力な国家の庇護の下で、自身が展開する余地の明け渡しを要求していたのである。……いずれにせよ新自由主義は……強力な国家を、経済を超えたところ、利益追求を超えたところに、国家を要求する。国家の働きにこそ、新自由主義は焦点を合わせている。」(123-124) クラカウアーのこうした危機打開のための指針は、1934 年の論文「新ドイツ経済法」で示されているいわば反対方向からの認識、つまりロシア型計画経済の拒絶と噛み合っている。「ヨーロッパの国々では、資本主義のロシア型の集団経済への移行は決して行われえず、このことは揺るがないだろう。これらの国々では、資本主義システムは任意に変更可能な経済システムなのではなく、疑いなくヨーロッパの諸国民の本性に深く根ざした精神的・心理的特質からの流出物である。例えば正しく理解された個人主義は、ヨーロッパの人間から根絶することはできないから、支配的な経済秩序の転換の際に併せて顧慮される必要がある。言い換えれば、ヨーロッパの土壌で計画経済を実現するには、資本主義の内部でも作用している個人の力に十分な余地が残されねばならないのである。」⁴⁾

だがドイツでは、政治システムがこうした意味でのナショナルな統合へと向けて起動することはなかった。イギリスに関してチャーチルが述べているように、伝統的な民主主義国では健全な人間の悟性が、極端を排しつつネーションの階級均衡を実現する中間地帯として議会を発展させたのに対し、民主主義の歴史が浅いドイツにおいては、政党の姿勢が硬直的であったため、危機に直面した議会は容易に機能不全に陥っていった。伝統的な方針に固執したブルジョア政党は、「中間層の反乱」と共に浮上した諸々の問題に対処できず、大ブルジョアジーに至っては、その独占的地位を守るために独裁的指導者を欲して議会制民主主義を否定すらした。「純潔さ」に拘泥した社会民主党や共産党などの左翼政党も同様に柔軟性を欠如しており、さらにはそれらは新中間層のナショナリズムをも拒絶した。だが「国民化された経済」が現状克服のための一つの要請であり、それゆえネーション概念はなおその使命を有している以上、「それに対して中間層が守っていた忠誠の粘り強さの内に、疑いなく理性の奸智もまた現われていたのである」(133)。ナチズムの登場以前にドイツでは、或いは政党が本来それが汲み上げるべき利益を十分に認識または代表せず、或いは政党の現実の行動とそれが掲げる理念とが分離していたので、政治機構は既に実体を失いつつあった。「政党システムの没落は、全体主義的プロパガンダが根絶せねばならない連関を……自ずから緩めていた。それは、プロパガンダが埋めることができる穴を作り出して、全体主義的プロパガンダのための地均しをしたのだった。」(129-130)

他方で新しい中間層の側でも、やはり『サラリーマン』で指摘されていたように既存の政治勢力を拒否していた。彼らは自らを見捨てたブルジョア政党に絶望したばかりか、ブルジョアの価値観である自由主義にも敵対的になっていた。そして労働者の政党が、「実現されるべき時機が到来していた中間層との同盟」(132)を妨害するためにあらゆる手を尽くしたとすれば、新中間層の側も些細な社会的優越の意識を脱することができず、また社会主義が標榜する政策の過激さに恐れをなして、実はその核心はヒューマンズムであるがゆえに相互に妥協は可能であることを看取しなかった。新中間層の内では、ネーション全体への行き場を失った、歴史的に見て或る限度内では正当な願望に、現在の社会的地位は維持したいというエゴイズム、管理階層としてポスト自由主義的な国家秩序に参画したいという野心、強力なネーションへの古き憧憬が混交していた。彼らは、ナチズムの擬似解決を信じこみやすい、それを真実だと信じたい精神状況にあった。そのうえ新中間層は、「いわば運命的なテロ」

(130) である経済的破滅の危機に晒され続けているから、不可避免的に退行していた。「充足の見込みがなく、それゆえ不安と一体となった飢餓は、最良の料理人であるばかりではなく、また最良の魔術師でもある。」(130) 退行を必要とするためにナチズムは、とりわけ絶望した中間層の青年たちに近づいていった。この青年たちは、危機の作用を受けていたばかりではなく、ドイツの理想主義や青年運動の影響のため、夢見がちで、反抗的であると同時に権威に憧れ、自己犠牲的で、運動それ自体を肯定して一切の目的を制限と感じる精神を育てていたものであり、要するに全体主義的プロパガンダの格好の標的となっていたのである。「ニヒリスティッシュな権力意志から生命を吹き込まれているため、戦争から生まれた一味は、ナショナルな理念の旗印の下で可能な限り最大の権力機構の設立を追求した。この権力機構は、ネーションの統一を、つまり階級闘争の抑圧を前提としていた。階級から脱落した中間層や、いかなる階級にも組み入れられない青年たちは、[見せかけの]階級宥和をネーション全体への進軍として肯定した。彼らの希望は不可避免的に、全体としてのネーションの偉大さを基礎としていたのだった。」(139)

5. 或る新たなモチーフの芽生え

先述のように『全体主義的プロパガンダ』は、クラカウアー再評価の気運の高まりの中やっと 2012 年に公表されるに至ったのだが、とはいえその存在はこれまでも、例えばアドルノのベンヤミン宛ての手紙から知られていた。すなわち 1938 年 5 月の書簡でアドルノは、クラカウアーの「大部のプロパガンダ論」を約める仕事が廻ってきたことに触れ、それは「全体としてはあなたのご想像通りの出来」⁵⁾ であるから、羨ましがるには及ばないと述べ、6 月には、それから公表可能な論文を作り上げるため、「ヒトラーの引用」を残して文章全部を書き直したとも彼はベンヤミンに伝えている。『全体主義的プロパガンダ』を理論的水準の低い作品として軽く扱うアドルノの姿勢は、研究所のために彼が書いた所見等から判断する限り⁶⁾、結局は、ナチズムを独占段階の資本主義に対応した体制と捉えるマルクス主義的テーゼへの信奉を拠り所とするものだった。クラカウアーは、究極の真理を語るいかなる教義にも不信の目を向ける「偏屈な」人間であったから、1938 年 8 月の手紙でアドルノの「修正」を受け入れることをきっぱりと拒絶する。自分は理論的先入観や独断を排するために事象そのものに向かったのであり、「ニヒリスティッシュな権力意志」といった単独的 (verschlossen) 概念、つまり何らかの理論体系から導出されたのではなく、事象自体から汲み出されたがゆえに相互に独立している概念を利用したのもそのためである。なのに「君は、僕が用いた単独的概念もろとも、素材との密着した対決から生み出された認識の全てを抹消している。君の原稿では、ファシズムは 100%分類され、[体系に] 組み入れられる完成された事象であるかのようだ。君はファシズムを最初から反革命と同一視し、その利害関心を多数派のそれと対蹠的な関係に置き、資本主義に対するその関係の両義性を消し去ってしまった。僕には『大ブルジョアジーの思想家』であるオルテガ・イ・ガセットが、君の原稿では『反動』とされているが、こうした些事が君の活動する次元を典型的に表わしている。……君の短縮は、僕が認識を獲得するために動いている層を完全に飛び越えている。僕は現実にも多面的な現象から、それらに当てはまる認識を奪い取ってきたのだ。」⁷⁾ この論争でアドルノが頼みとする政治思想的立場は、その枠内でいかに精緻化されようとも、事象自身の側からの検証に耐ええなかったと私は考える。それに対して全体主義的プロパガンダに関するクラカウアーの現象学的記述は、彼が現実

にそれを経験し、またフランクフルト新聞の代表的執筆者として独りで対決してただけに、例えばナチズムとプロパガンダの本質的關係やプロパガンダの効果の分析などの点で、今日いよいよ貴重な多くの理論的示唆を与えてくれると私は考える。

さらにこの作品は、クラカウアーの思想展開を辿るうえでも重要な意味を持っているだろう。まず、そこで披歴されているナチズム理解は、ワイマール時代の新中間層論、自然と歴史を双極とした歴史観、そしてメディア理論で漏らされていたカタストロフの予感の展開であり、具体化であった。1920年代半ば以降、理性の歪んだ形態であるラティオの支配が崩されて、真の理性がもはや自然の暗い力を抑圧し排除するのではなく、それを「抱擁」⁸⁾ しつつ解放することをクラカウアーは期待していた。しかし写真など新たな技術の誕生と共に到来したのは、無視された自然の反逆としてのナチズムであった。「新しい技術的進歩の実現は、新たな人間の退歩の危険を呼び出すかのように、人間の自然に対する勝利は、人間に対する予期しえないほどの勝利の機会を自然に与えるかのように見える。幸福のチャンスの成長は、不吉な運命の高まりと不可避的に結びついているかのようなのである。」(59) 彼のナチズム分析が十分説得的であるならば、ワイマール期のクラカウアー思想の鋭敏さもまた証されることになる。

他方で、1941年3月にアメリカに亡命した直後からクラカウアーは、ロックフェラー財団から奨学金を受けて2年間ナチズムのプロパガンダ映像の分析に取り組んだが、当然ながら『全体主義的プロパガンダ』の成果を踏まえたこの仕事の過程で、1960年の『映画の理論』に結実する映画への基本的な視角も固められたのだった。クラカウアーの結論によれば、観る者を日常から疎外し、通常不可視のものを暴露しつつ画面自体に語らせることが映画の本質であり、ナチズムのプロパガンダ映像はそれを正しく理解したうえで、人間を退行させながらスクリーン上の偽りの世界の中に立ち入らせるために、この特性を駆使しているのである。まるで現実自身を虚構へと変形するかのように、ナチズムの方面作戦映画はもっぱらニュース映像のモンタージュで自身の「正当な」侵略戦争を描き出し、レニ・リーフェンシュタールの擬似ドキュメンタリー「意志の勝利」は、映画のために観客への陶醉効果を計算して举行された大衆集会のショットから、画面上でナチスの党大会を作り上げている⁹⁾。

第三に、全体主義的プロパガンダを巡る考察は、極めて先駆的な広告論である1949年の論文「大衆向け広告」を筆頭とする、戦後のアメリカまた自由主義社会一般に対するクラカウアーの批判的考察にも活かされている。「大衆向け広告」によれば、アメリカでは広告は単に個々の商品への興味を喚起しているのではなく、ナチズムのプロパガンダと同様、我々の思考と行為様式の中に介入してそれらに影響を与えようとしている。権力意志からというより大量に生産される商品売り尽くす必要から、広告は画一的な生活様式を、人間がそれに即して生きるべき擬似現実として浸透させているのである。広告という「心理的帝国主義」が作りあげ定着させている虚構の生とは、満ち足り、富と名声を約束され失業や破産とは無縁な、持続的に進歩しつつ永遠に続くかのような「若者のための生」である。人々を消費へと誘うこの夢幻的世界が広告を通じて力を持ちえているのは、世界恐慌前の黄金時代の残響であるからのみならず、究極の現実逃避としてのナチズムのプロパガンダと同様に、それがアメリカ人の密かな苦悩を射抜いているから、言い換えれば心理的・身体的機構の乱れを足場になっているからであるだろう。いかなる形態であれプロパガンダが猖獗を極めていくという事実は、社会の病弊を告知している。アメリカでは人々は絶えざる競争のプレッシャーのために、また近代社会の根底に開いた空虚のゆえにも不安なのであり、そうした不安に照準を合わせているから、若者が疑問を抱かず目的志向的に生きている、破滅の危険の排除された偽りの世界を広告は展示するのである。そして

クラカウアーは、やはりナチズムのプロパガンダに関する主要な洞察を下敷きにしながら、広告の効果は観る者の心理的・身体的構造の揺れによっていっそう高められている、と指摘する。広告の現実逃避は完璧ではありえない以上、しばしばその夢想的性格は破られて現実が露呈されており、そのため広告に晒される人間は幸福の夢と、完全には取り除かれることのない現実の圧迫という二つの極の間を、永続的に揺れ動かされるであろう。「この動揺によって人の心は、夢のおかげで現実の圧迫を和らげられつつ、同時にそれが夢であることをも悟る。あるがままの生とありうるかもしれない生とのこの混交は、麻薬のような陶醉効果を持っている。」¹⁰⁾

しかしながら『全体主義的プロパガンダ』は、クラカウアーの思想展開のいわばミッシング・リンクであるに留まらない。それは、或る新しいモチーフを彼の思想が胚胎する起因ともなったであろう。そうしたモチーフとは、人間の心理的・身体的機構を残りなく制圧しようとする全体主義的プロパガンダや広告の傾向に先んじて、抑圧されきることのない人間の不随意的自発性の領域を理論的に確認した確保して、偶然の出来に備える、という思考動機である。運命概念を葬る脱神話化に与するクラカウアーは、宿命的な破局を説く悲観的かつ抽象的な歴史ヴィジョン—例えば啓蒙過程の神話への避けえない逆行という神話—to同調することは、決してなかった。『全体主義的プロパガンダ』の完成後、ナチスの影が迫る 1940 年のマルセイユで着手された彼の映画理論は、「偶然的で、未決定で、無限な」物質的次元を暴露することに映画の使命を見出している。そしてそこではあらゆる映画の中でもスラップスティックが、特に傑出して啓示的なジャンルとして明らかにされていくのである。「スラップスティック (Groteske) は、……体系的に偶然を運命に対して戦わせ、根拠のない専制の不合理的を暴露し、ほんのちょっとした動作で陰險な客体を回避する。ギャグとトリック。これらは悪しき強制に対する弱者のメルヒェン的な武器なのである。」¹¹⁾

*引用文後の括弧内の数字は、数字のみの場合は『全体主義的プロパガンダ』の頁数を、数字の前に MK がついている場合は『我が闘争』の頁数を、それぞれ示している。

Siegfried Kracauer, *Totalitäre Propaganda*, in *Werke Band 2.2 Studien zu Massmedien und Propaganda*, Frankfurt am Main, 2012.

Adolf Hitler, *Mein Kampf*, Elite Minds Inc., 2010.

注

- 1) Christian Fleck und Bernd Stiegler, “Nachbemerkung” in *Werke Band 2.2*, S. 848.
- 2) 以下の引用文中の斜字体は、クラカウアー自身による。
- 3) Siegfried Kracauer, “Exposé. Masse und Propaganda. Eine Untersuchung über die fascistische Propaganda, in *Werke Band 2.2*, S. 13.
- 4) Siegfried Kracauer, “Das neue deutsche Wirtschaftsgesetz”, in *Werke Band 5.4 Essays, Feuilletons, Rezensionen 1932-1965*, Frankfurt am Main, 2011., S. 514-515.
- 5) Adorno・Benjamin, *Briefwechsel 1928-1940*, Frankfurt am Main, 2008, S. 327.
- 6) Vgl. *Werke Band 2.2*, S. 821-824. Helmut Dubiel, *Wissenschaftsorganisation und politisches Erfahrung*, Frankfurt am Main, 1978., S. 34-37.

- 7) Theodor W. Adorno • Siegfried Kracauer, *Briefwechsel 1923-1966*, Frankfurt am Main, 2008, S. 397-398.
- 8) Siegfried Kracauer, “Those Movies with a Message”, in *Siegfried Kracauer's American Writings Essays on Film and Popular Culture*, California, 2012, p. 80.
- 9) Cf. Siegfried Kracauer, “Propaganda and the Nazi war film”, in *From Caligari to Hitler*, Princeton, 2004.
- 10) Siegfried Kracauer, “Gängig Werbepraktiken”, in *Werke Band 2.2*, S. 188.
- 11) Siegfried Kracauer, “Americana”, in *Werke Band 5.4*, S. 561.